

七、魏晉南北朝

一、後漢の衰退と諸思想

和帝以降、社会混乱が激しく、安帝以後の皇帝は即位時に若かったため、外戚の権力が増加、宦官が台頭。

一―一、衰退

〔¹〕…宦官が党人を捕らえて禁錮したこと。

(第一次) 桓帝の一六六年、宦官の横暴に憤慨した李膺・陳蕃らが政治批判をはじめると、太学の学生たちも党派を結成して政府を批判。党人の多くが逮捕され、終身禁錮の刑を受ける。

(第二次) 靈帝が即位、李膺らは釈放されたが、再び宦官を討伐する計画を立て、それが発覚したために一六九年に大規模な弾圧が行われた。百余人が死刑、六百人以上が禁錮に処せられる。

鄭玄、何休、趙岐らがこの事件に遭遇。門を閉じて経学研究に専念し、後世に残る注釈書が誕生。

〔²〕…〔³〕…が中心となつて〔⁴〕…という一種の

宗教結社を創設、数十万の信者ととも反乱。布教の際、黄老の道を掲げて、呪術的な病気の治療を行うばかりか、太平道の教えにしたがえば不老長生の術を身につけ、仙人になれると説いた。

〔⁵〕…〔⁶〕…が率いた教団。入信の際、五斗(約十^リ斗)の米を納

入する。呪術的な病気治療を行い、二代の張衡、三代の張魯と引き継がれるうちに、勢力を拡大。

◎これらは中国固有の宗教〔⁷〕…の源流となるもので、明帝の時代に西域より伝来されたという〔⁸〕…とともに相互に影響しあいながら、民衆の間に根づいていく。

一―二、後漢末の思想家

①〔⁹〕…〔¹⁰〕…

漢王朝の再興を願ひ、献帝に献上。王充・王符の精神を引き継ぎ、讖緯説を排斥、神秘主義を否定。

道徳・刑罰両方に価値を認め、どちらを用いるかは時宜によって決める。〔¹¹〕…を唱

え、上知と下愚の間に中人を設定、法と教育こそ中人を導くことができると説く。

②〔¹²〕…〔¹³〕…

過去の出来事を論説しながら、現実世界のあるべき姿を追求。天人相関思想を否定し、天道を単なる自然法則と考え、人間を中心にし、理性を尊重する立場をとる。無条件に親の意向に従

う孝を否定、子が理性的に判断して自分自身の主体性にもとづく孝こそ真の孝であると主張。

◎社会を冷静に分析するとともに、人間を尊重する。魏晉における人間そのものの発見へと継承。

二、魏晉時代の思想

※〔¹⁴〕…〔¹⁵〕…の撰。二八〇～二九〇年頃に編纂。

〔魏書〕三十卷(本紀四卷、列伝二十六卷)〔蜀書〕十五卷(列伝のみ)〔呉書〕二十卷(列伝のみ)

〔¹⁶〕…〔¹⁷〕…明の長編歴史小説。元末明初の羅貫中の作とされる。『三国志』

に基づいて、三国時代の史実を虚構を交えて記す。魏の曹操、呉の孫権、蜀の劉備・諸葛孔明らの活躍を通俗的に描く。日本でも江戸時代に翻訳され、愛読された。

二―一、三国時代の儒教

・魏王曹丕、後漢の献帝から禅譲。曹魏政権の政治思想を形成したのは、主に漢末清流知識人出身の人々。後漢の衰退を儒教の弊害がもたらすものとは考えず、理想の儒教国家実現の必要性を痛感。

・儒教の国教の地位は失ったが、代わつて国教の地位についた学問・思想は存在しない。

〔¹⁷〕…後漢の鄭玄と学界を二分する権威を有した魏の儒学者。『尚書』『詩』『論語』

〔三礼〕に注釈。鄭玄の学を学んだが、机上の空論であることを痛感し、伝統的な漢代儒教の系統に連なる復古的な学説を唱えた。呉の虞翻も鄭玄の学に反対。

〔¹⁸〕…〔『三体石経』〕の建立：儒教の經典の本文を古文・篆書・隸書の三書

体で石に刻んだもので、魏の正始年間に洛陽の太学にたてられた。

二―二、玄学と清談

・正始の頃、〔¹⁹〕…が関心を集め、儒教の書物もそれで解釈されるようになる。

◎〔20〕『易』『老子』『莊子』↓〔21〕

その議論は〔22〕

・〔23〕…漢魏の諸説を取捨選択し、自説を交えて『論語集解』を著す。老莊思想を主とする。無の重要性を説く『道論』や、無が有を生み出す道の「用」であると述べる『無名論』を著す。

・〔24〕…『老子』『易』の注釈を著し、何晏の貴無思想を発展。何晏と同様、『論語』を老莊思想に基づいて解釈。無が有の本（本体）だとする存在論を打ち立てる。

・二九四年、司馬懿が曹爽一派を肅清、魏の実権を握ると、時代は二六五年の魏晋革命へと突き進む。何晏・王弼の死後、司馬懿が王肅と親しく伝統的儒教支持者であったために下火になるかに見えた玄学・清談は、ますます盛んになり、知識人の間に浸透した。

◎〔25〕の登場：阮籍・嵇康・山濤・王戎・向秀・阮咸・劉伶

世俗をさけて、竹林で音楽と酒を楽しみ、清談にふけた七人の隠者。魏晋のサロンで清談の話題をさらう。反礼教の振る舞い。

〔26〕…玄学に優れ、清談に巧みで、詩人としても名が知られる。元々儒教による理想社会実現を夢見ていたが、魏晋時代の社会混乱と価値観の傾倒により、老莊思想に向かう。

〔27〕…老莊思想を神仙の存在と長生の実践法とを理論づける神仙思想と見なす。

・〔28〕…〔29〕を著す。至無・虚無は有の欠遺にすぎず、生という能力を備えてないと断定。王弼らの貴無思想を全面否定し、有と無との関係を逆転させる。

〔30〕…〔31〕の注釈を著す。裴頠と同じく、無に有を生む能力はなく、有は自生するという。造物者を否定し、万物は自造（自主）し、共同して社会を形成しながらも、自足・自得し独立した存在であると説く。

三、東晋・南北朝時代の思想

・三二六年、西晋滅亡。以来、華北は非漢民族の周辺諸民族の支配する地となる。↓〔32〕

一方、江南には晋王朝の一族である司馬睿が東晋王朝を建てて以後、宋（劉宋）・齊（南齊）・梁・陳という漢民族の王朝が相次いで興起。↓〔33〕

・貴族制社会。〔34〕…玄学・儒学・文学・歴史の教養を身につける。

三二一、【仏教】

◎〔35〕…老莊思想を主とする在来の思想を媒介に外来の宗教・思想である仏教を理解。

支遁…仏教者でありながら、般若の空を老莊思想的な道・無という言葉で説明。

『逍遙論』の『莊子』逍遙遊篇解釈は、郭象をしのぐと評される。

孫綽…儒教・老莊思想・仏教の〔36〕を説いた最も初期の思想家。聖人は生得ではなく、学問修養によってなるといふ説。↓「聖人可学論」の淵源の一つ。著書に『喻道論』など。

・道安…仏教の正確な理解を促す。仏教は仏教として認識されるようになる。

慧遠…道安の弟子。「神不滅論」（三世応報説・輪廻説に基づく）を展開。『沙門不敬王者論』。

范缜…『神滅論』にて仏教側の神不滅論を批判。これより、神滅不滅論争が活発となる。

・〔37〕…歴大な仏典を中国語に翻訳し（旧訳）、中国仏教発展の基礎を築いた西域僧。翻訳された仏典は、竺道生らの手で南方にも伝えられ、中国全土に影響を及ぼす。僧肇…鳩摩羅什の弟子。般若の空の思想を玄学的表現で説く『肇論』を著す。

三二二、【道教】

道家思想…宇宙の根源としての「道」の概念を道教にもたらす。

神仙思想…長生不死の神仙の概念をもたらす。

・〔38〕…「神仙可学」を主張。金丹（金属の仙薬）を服用。後の「功過格」（日常行為の善悪を点数化した表）につながる思想を説く。

・〔40〕…上清派道教の大成者。編著書に『真誥』など。

仙界・人界・死者の世界の様子、升仙の方法、真人（神仙・仙人）の位階等を具体的に語る。華北を統一した北魏では、はじめ仏教が盛んだったが、四四六年に廃仏、道教が国教になる。

その後、仏教と道教との対立が激化。